へ13
3157
17

開巻驚奇侠客傳第四集巻之二

東都　曲亭主人編次

第三十三回　姑摩姫莎庭に四賊を斬る　復一郎後门に石枝を逞す

閣客話紹主説補姑摩姫ハ。乳母縫殿が卒哭忌の追薦の與にとて。如意宝珠院へ詣る。その折従父女弟楠苔子が。瘧瘡を患ふる事の趣及その八字生来を憶ひも知りて宿所にかへりたるその夜分人定の鐘の響く時候独臥房に入りてさるに折から庭に鳴く虫の音に忽然として殺氣あり。姑摩姫枕を欹て怪しや今宵ハ要こそあらめと思ひのうち毫も闘ぎ東衛るまで寐も睡らで小霎時も由断せざりける。却這段ハ第三集巻の四の尾にあれバ看官兼知れるなるべし。童て這里に復せり約その間ハ五十槌電次隆光们が事及長總と衿笠小夜二郎と木綿張荷二郎们が事の顛末を解も分べきよしヨヌ为りよりて其頭の趣を這郡と亦く具にして更に又

へ13 3157 17

第二集の四の巻の尾ふ續ぐるり。看官前後を照らしてとゝ。間話除繁ふ程ふ姑麻る姫い
臥々外面ふ心を配るゞ。夜い既ふ子二刻るゞんとゞふ時候殺氣盛ふるりーかがうちも思れむ身を
起しと。帯引結び裙短ふ袴勝しゝ枕邊る。護身刀を腰ふ帯て獨悄々地ふ書院ける。
縁頬ふ立出さ雨戸一枚開けゝ。庭草履を極捞るふ穿捨てける板金剛の一雙屐石の
上ふありしと。島夜ゆも白く細るる。脚指頭ふ引穿て徐ふ出て前栽の樹の蔭假山の影ま
でも送る隈るくうち巡る程ふ忽地庭門の外面ふ人あと。鉤索をうち掛るとおやしく墻ふ乗り
たちゃ下り立て潜入るゆ二人ありけり。是則別人るゞも初五十槍隆光が遣しる那念珠七
と蚤介と姑摩姫い旦光ゆ。そもくも是を透し見て原來那奴們い偷児るんとく引着く
捕捕らゆと思へい鬧ぐ氣色もるく。書院の方ふ退いて。樹蔭ふ立々等程ふ件念珠七蚤
介い徒るべしと思ひるゞ迭ふ耳ふ領ふく。倶ふ檐下ふ身を寄て内の虚実を知んとく。
雨戸ふ耳を傾る。背後ふ烈しく女子ゞ一聲癖者等と吸掛られて駭ゞんゞる二賊の周章。

松ふ残の雪るゞ星光ゆも白紗る面影い那姑麻る姫るゞんと思へ不覚る胆落てゆ十
二分の鬼胎ある。然ばと逃るゞも脱しゝせじと思ひくゞ左右ふ別る歩快く聲も合せ撥數ふ
砕らんと找ひ刃の光と姑麻る姫い小松を盾ふ遣違しゝ引外しと見りとゝ引抜く短刀ふ拳の冴ふ見
も届ゞ空數るゞ念珠七い猫児ふ白鼠の断末魔胸と刺れて仰ざるふ仆ゞと息ふ絶ふける。
蚤介ゞれふいゞ怯れて吐嗟とだゞる。一足飛ふ逃るゞ姑麻る姫透しゝて十歩も走らせじ丁と撃る
る銑鋭い島夜ゆも狂ふ修煉の短刀。快と宛龍火の如く閃ぬく程ふ蚤介い背とゝと曾前
も老。鍔際迫て撃る串れて身と反ゝ苦と叫ぶ聲も弱引も死でけり。姑麻る姫い思ひの隨ふ既ま
二賊と撃る捕りしゝ先蚤介ゞ屍骸の邊ふ立よりゝ短刀の柄を探りゝ抜含て則賊の袖ゞと。
鮮血を拭ひ鞘ふ收めく。舊の処ふかゝる來て初ふ驚ゼし一個の賊のゞを極捞りゝ引起しふ酷く
窮所を刺れしゝゞ身いんゆ冷て氣息るゞ。徒ゞりの小賊們ふ牛の刀と用ひい過さりけりと突
放せば又倒るゞとゞかゝゞ天明て後ふ安次們ふこれらのゝと告知せんと思へゞ悄ゆふゞ仮

内に入る折浮を盤る柄杓を搦りて、先づ交ふ西二番汲合る水を心長閑く沃掛ケ、
緑頬を巾架の上に拭りて、両手を拭ふ安侠の沈勇両戸を密と引閉て、臥房に入る程に、
いと深る夜と共に幽りける枕方の燈火を掻起して、被る衣裳を熟視るに幸にして血に染ら
ず、脱も更るに及ばずして、枕に就る知るべし絶てなりけり。怪しけれども姑摩姫に向も
睡らでありける庭の虫の音亦復乱れて殺氣初に弥倍けれ胸安からぬ怪しけれ今宵は怪
有るべきなる又偷児の入るべきあらん今番の必殘痕を肩にして生拘りて其支當黒の根を断め
と思ふの三人を喚んさんぬ。又身を起し短刀を引提て初の縁頬より両戸一枚推開て窺ひと出る
檐下近く潜入る癖者あり。是則別人なるぞ。兇悪血氣の後生なりける五十槌雷九郎隆
成然べ件の隆成が曽て紀坊八が先きに立て這八九の荘院の塀を乗り内に入る。密内知る
るれば庭門なる両折戸の栓牝を推破る程に後れて塀を乗る鼠坊八を等に及ばず性急に功成
貪る癖なれば我快暗跡を做さんぞと思ふ心の目生光を庭門より入るとぞ俄潜近つく書院の内に

忽地閃りと出るのあり。隆成吐嗟と歩を駐めて薄闇裡に透し見れば、疑べもあるべき女子の原来那
奴の姑摩姫なるぞ。今宵の事を知れ狡遮莫那奴一個と目今這里を結果すべ餘い怕るに足る
のなし。目前物見せんと大胆無敵の肚に尋思も火速の進退何に毫も躊躇を死走の蒐り接
見を是刃の烏夜の電光と烈く撃ちを姑摩姫に向ひて潜り又闇潜る至妙の剽姚仙
術稀世の剣術に何人か敵せん況暴悪非類の兇賊悍しとも邪と以正に捉へんよりの方け
ば隆成が口い醉るが如く撃る大刀取次に受るに砕れども砕れども拂ふ拂難き陽炎の立ち
定めなく前後と出べ後に在り這那と撃く幾番も悩されて立瞑む眼を睜り氣を激して又踏
入て撃んとせば姑摩姫なる身を捩て短刀より七輕るがる右の拳を礮と打つ打れて痛禁堪ざ
るけん刀を曳哩と落しなる隆成慌て挿漆の小刀を抜んとすを撃る程もあらば姑摩姫今隆成が
来る刃を手に食抗て庁を離れ斬の大刀風を飭れる隆成が撃れ首に潰る鮮血と共に滾げり。
這処に鼠坊八も稍庭門より潜入て既に近着く書院の頭に敵あるとぞ覗て挑むが如く呼べば

さていと　！　原来事を知られ狡と速ふ猜しと毫も猶豫せず先ず找ち隆成と敵をせどそを星明夜なふ星を便りふ霜歩ゝ引提なりける朴刀を拔敬めそを走寄る目前ふ見く敵の刃と白刃坊八丁と受流しと両ゝ合戦ひけり余程ふ姑麻る姫い腰ふ帯ふ短刀と拔もゝ者ゝ瞬間ふ一個の賊の頭敵を落せ折らゝ又後方より走蒐れる賊あるを知れども慌る色ゝ無く踵と旋しと拭もあへず血刀と鳥夜の蛍火と閃ゝを勢ひ当るべらもあらずしと鼠坊八を辛くと僅ふ挑戦ふめらゝ素より是剣侠女子の敵るふ足るめらゝ所れば死地ふ入らる剣刀身と考ゝ露ふ先ゝを浮世の夢野覚ゝ牡鹿の角の束ゝ間ふ痛痍四五ゝ所負ゝ怯へ者ゝ恐ゝ脱さゝと趕ゝ出ゝ背ふ韓竹割る砍伏せけり這時ふ者ゝ假山ふ高麗結縷草ふ鳴く虫の音のおのゝふ和ゝ殺氣も立ぜらゝ姑麻る姫耳と傾けと今いも這奴ゝ丈黨の又潜入りと立躱れふるべ。夜や深ぬらんとうち仰ぐ天晴耳ゝ許多ゝ星と稍久く眺る眉と頻草めて思ふち怪ひべ今もるふ賊星女宿を犯ゝたり猜るふ強人の頭領るめるとゝ

小嘆囉ふ這方の虚実を張覗せんと遣ゝたるふ狡猾ゝ人ふ経るゝ衆賊ふ打入るともあるべ。只一方より考るの形ゝ幾十人あらとも我軍身を對治せんとかゝるもあらゝ前後の門より稠入ゝ安次們ふ不意と襲れて防禦ふ便りを失ひ其告知ひべ。ゝ既ふ尋思とゝ考ゝ引提る血刀と屍骸の邊ふ投棄て書院ふかゝ入らんとるふ雨戸の閉たる処より指燭を外面ふ差出と看るのゝありけるを誰やと問へば垣衣と遽ゝく外ふ出て却姑麻る姫ふ禀ゝ考ゝ次の間ふ臥ゝ出ゝを知ざゝふ窓打風ふ敬焉されゝ臥房の這方の隔亮の開れてありければ灯光の刺ゝを心つけてゝ考ゝ指燭ゝを厠を索ゝ考ゝ那里ふゝを見ゝ出ゝ浄るふゝ思ひゝ遽ゝく出て恁ゝと告知ゝと那這ゝ方僅這里ふ雨戸一枚開ゝあれば且敬焉且訝りて倘ゝ庭ふ出ゝ考ゝ還ゝ考ゝふ安堵侍り。什麽賤奈ゝ俱ゝ此ゝ小夜更ゝふ庭ふ獨出ゝ考ゝ問へば姑麻る姫微笑ゝ

あるかねど安次ゆもあるゐ内と准備をんと必ずとあるその折倶る听ねかーと答てそゞ俄在りける程ゐ隅
屋復一郎安次い垣衣ゐ喚覚されて訝りあるゝ遽しく起てゐるを袴を穿んゐ燭と乗て那這と
索して這里ゐ来ゐれゞ姑麻る姫い縁類ゐ中戸一枚繰開かと尻ち捲て安次とも垣衣と倶ゐ傍ゐ
と坐らと却癖者と四人まで斃る果ーたる支の趣首ゐ尾まで箇様々々と報知あそ必ずとーさゝ解ゐせゞ
安次も垣衣も駭然いとそ耳と傾けそゐ亦凡夫の所行るゞとそ連ゐゐ知勇と感嘆ーゝ悉るりー
今宵の首尾と祝と倶ゐ飲ゞる當下姑麻る姫又ゐゐ曉ゐ我猜ぜー如く件の四個の癖者い仇敵
主人ゐ痛心れる刺客ゐあるぞと支黨ゐるる偷児るゞ必ずゐ頭領あて重て打込るもあるゞ
ゐい前後の門ゐ襲るゞ狩料りかるそのゐ配い後ゐそせゐ枚も件の癖者们を生拘んとゐ必ずか
ども勢ひ猛ゐくーと皆斃る果ーたれゞ今ちゐ穿鑿の照験るゞと鈍ーけれ先や屍骸と換を
べーとゐゐ安次ゐ云ゐて燭と接て身と起せゞ垣衣も共伯ゐ主ゐ倶ーる庭面の書院ゐ行て樹の下
ゐ庭門の這方まで砂仆される四賊の屍骸い鮮血ゐ淋れ横ゐれゐ姑麻る姫も亦ゐの折ゐ火光ゐ

就てゐく視るゐ初ゐ斃る捕ゐ一人い小嘍囉ゐんと必ずゐれゐ鏘細衫と被笠竜て腰ゐ嚢と着た
るを合ーとそれゞ焔硝ゐ又後ゐ斃る果ーたる両個の賊い名あるゐの狡とかゞーて打扮特ゐ物々ゐ
ゞ這们も腰ゐ火器と帯たる姑麻る姫い安次ゐ件の四箇の火器と合ーて書院ゐかゐ入んとせー
折安次い破られる庭門の戸と引寄せんとそ遽しく走りかるを姑麻る姫やよと喚禁めそ那里い那俄
措れか我ゐ必ずゐーれゞとゐゐ安次阿と応てそゞ俄後方ゐ従ゐゐ恁而姑麻る姫い縁類ゐ書
院ゐ入ゐ初の如く中る両戸と閉さと却安次ゐ示ゐ斃られる癖者们が腰ゐ火器と帯ゐる
必是火と放そ暗躰ゐ出ゐ與ゐそあるけゐ縦その事ゐれもとも等者空ゐ退んゐ時移ゐるゞ
ちち寄ゐべー開ゞ庭門ゐ稠入ゐゞ我單身ゐ對治せん倘玄関ゐゐち入るゐ這里ゐーて遠
かれゞ另ゐ戌ゐ亜直ゐも及ゞ背門い復一心と屬て稠入る賊のあるゐ礫と用て斃る退けゐ垣
衣い婢妾母と徐ゐ喚覚ー這趣と告知て期ゐ臨むも鬧ゐ騒ゐ漫ゐ駭鬧ゞ
不覚の罪と許かゐ豫ゐの美と誡むべー今ゐーて燭臺のゐん限ゐ准備て衆賊入ゐ

入るを待ちて速に火を點じ列ねたる玄関と背門の方と這頭の壁際に間配るべし奴隷并に農僕ども僕們の耳房に母屋に離れてあれども他們も亦駭聞ぶく側杖喰ふるもあらば一人たりとも王の損ぜん駭聞ぶく騒と呼ばれて窓ろ〻と喚禁めよ是もまた垣衣仮の役人我逆よ料るが如く今宵亦復事あらば憑むい仮と復一のをよくせよかと其こ示せば安次先答るやう今の初め神機妙算和漢に類有るに女丈夫なれども又何ぞ議一亭に隨意従ひまろらんこそ初論に論ずるに只あん身邊を立離れて背門のうしを守んに心苦しに限りを切て角弓眉尖刀をんど短兵を携て賊徒を防せぬりとこへば亦垣衣に憶ぶも嘆口氣にてあるべ女子に生れて恁ぶ折ふ御先途に立甲斐なき恨を示ばるとを姑麻を姫慰めて然る後に垣衣白刃を振ふく敵に當るも奥を守りて後安く主に賊を撃るもの勤いもの忠義に復一もあるべが単身にて多賊を撃ぶに微に在りて器械まよりに我短刀を足れりとまるへ仮ぶ修練の小石を飛しく仇を撃ぶと異ふるぶ今は丑の刻ぶりなん快々准備をせよと諭せば安次垣衣のかへ言ふ〻ふけ

むりて俱に〻しく立ゐけり恁り〻程に真夜半時候より後門路潜寄る出水木綿張一隊の衆賊に〻く暗闇を等しけるに〻を立示るまでも静悄として音もなれば内の虚実を覗んとて獨荷三郎ぶ墻を乗て既に潜入るまでも其も亦速まれて床ぶ挺頭三们は是も亦心の赤ぶ所為を思ひ沒ひ外面に他を等と未だ眄い経ざりける丑の五刻とふ時候猛奇に前門のうと開ち物喧連りふ〻〻〻ぶ。挺頭三耳を敢て那皆所ぶ前門より両頭領の一隊に打入るふ疑ひるに非除暗闇ぶ〻ぶとも快稠入て分捕せん這期に後まて木綿張一個の功ゆるせと置示せば等困倦ふ小嘆躍ちろゐるうと十四五名各先後を爭ひて走り蒐つ後門の門扇を推ちる鎖に固かう快打破れと相罵て准備の塩槌を振抗ふ〻ちや角門扇を打破て齊一吐と綱入ぶ前面に亦小玄関わり忽地聚を燭臺の數灯けるぶ隈もなく白晝の如に明うあて見勢人〻も〻ぶらけ小式臺の真中に待設る一個の若黨辮奴の袴〻く袴の裾を高く結る腰に両刀を跨て傍に紙張の長小籠を引着るに要ぶ〻その人自面優形ゐれ敵を恒れね

主僕前後拉糾賊
夜ところあるれすあるいろおと傳け後
あるいろ傳キヤ人もあるけ
とみひめ
とみハ

安つぐ
有像巻四十六

心魂。長谷部信連とも云つべし。凛然たる威風四下を拂て。罵呼る聲も太く。来るを是甚
麽たる者ぞ我猜し。強盗毎女性主人と侮て。蟄甘る龍の影鬚を援べし。血に塗て地方の民の
與に患を禳ず。我を誰とかしらん。這八犬荘の姫上の。譜第相傳。忠義の壮士。隅屋復二郎安
次此に在り。然りとも知らでや。夏虫の火虫に似たる。天の冥罰逃るに脚のわれべしとて。一歩も走る覚
や。首を延て刄を受よと。いひもあへず。出水挺頭三。怒れる胴聲ぬり立て。唱る青猴子。前門へ。一隊の
火家が。我より先に稠入て。姑麽の姫をも。數を捕ふる物も在。單身にて防ぐべしとても。歯が立べや。命
惜くば一千金。遞与して主の菩提を吊ひね。そを不兼知の不の字でもぬかさば。和郎はもとより。園宅の男女を
皆屠ん。大家本意をとげさせよと。罵る聲と共侶に。咄と嘘起し小嘍囉。敵は一人と侮りて。我も〳〵
兵器を打振々々。左右に墻ある通路を。皆後れじと。競ひ蒐るを。安次は物ともせず。準備の小
籠に貯へたる。小石を抓で。礉と打つ。修煉錯はず。先に我とし賊は額を打破られて。苦と叫
びて仆れけり。程もあらせず又打出す。投石は冬蟲の飛ぶが如く。瞬間に六七人。窮所を打れ。眼眩きて。象

棋仆に仰反たり。挺頭三はこれに舌を振ひて。小嘍囉に持したる角弓合て。前来を料て。寛寄て射て斃
さんと弦に番て固る程しもあらせず。飛来る投石に。挺頭三も左の肩尖。轂を破られて。弓笳を撲地と落
したる。怒に堪ねば。奮然と刀を抜て走蒐るを。安次透さず又打つ礫に。挺頭三は額を轂られて。骨も
砕けし。窮所の痛痍に。撲と仆れて死でけり。向ふに前る児安次の修煉に。衆賊辟易して。轂を仆さ
るもの十名あまり。残るも痛痍を負ざるは。命を限りに逃亡ける。是より先に。垣衣は準備錯ず。前
後の門より多く。夜偷の入りし折も。張燈燭臺に火を點しつ。とまる婢妾毎も。隊より玄情を
ゐるにより。おそる〳〵起出て。給ふのさまなりければ。時を移さず。間配る程に。奴隷竝に農僕們は。母屋を
離れし耳房に在り事の。息劇の騒覚て。皆出て見つ。入々にふせまうと。罵る聲と。垣衣多く
知りて。獨矮樓に走登りて。窗戸推開きて。聲高やかに。やよや衆人。譟ぐべからず。夜偷の禍鬼ありといへ
ども。復一刀祢と。姫上さへみぷりうちんを下し。あひてまべく。轂を捕あひ。任れば吉文の鎮るまで。大家そろ
侭篭り居よ。漫に出て。側杖打れる僞なの上旨に從はず。越度たらんと。姫上の仰になりで。あ給て敍と

ゆゑに天家ゆゑ原来たる盗賊の過半殺されるゆゑ姫上恐ゆゑ固さまざまそれを憂ることもあり大刀抜く術の沼を知る及俺们ゲ出るもゆゑ脚賃縁よりんのことゆゑ沼良ゆ耳に入るゆゑ中ゆゑ彼もゆゑ獨頭を傾けて縱その職をゆゑもまの先途を外ゆゑ阿容々ゆゑ竜居ゆゑ犬猫も劣るべ輔の相公のゆゑ第の這里ゆゑ遠くもゆゑ那相公ハ姫上の叔父公後見ゆゑ那里へ報ずゆゑ加勢をゆゑ萬ゆ一もゆゑ失錯ゆゑ然けれども目今ハ闇戰の最中ゆゑ前後の門より出ゆゑ拘實より殺出ゆゑ邁ゆゑ俱ゆゑ辛しゆゑ拘實より潛出て頭ゆゑ這ゆゑ他ゆゑ燒されゆゑ然ゆゑ外ゆゑ出るゆゑ西五名ゆゑ他ゆゑ俱ゆゑ辛しゆゑ拘實より潛出て頭ゆゑ棋り蟻子網ゆゑ拂ゆゑ夫ゆゑ正直の第を投て走りけりゆゑ却殘りゆゑ農僕们ハ困ゆゑ果て在りけるゆゑ姑且ゆゑ背門の賊のゆゑ餘ハ絶ゆゑ逃亡ゆゑ物响静ゆゑ殺されゆゑ殺されゆゑ歩ゆゑ走て痛痍ゆゑ仆ゆゑ小嘯囃ゆゑ死ゆゑ二名あり三三間四方ゆゑ形勢を鑑定ゆゑ走聚ゆゑ索を棋ゆゑ然而破られゆゑ後門を成ゆゑ夜を明けり間話休題再説五十槌電次隆光ハその子雷

九郎隆成の殺されゆゑ恨ゆゑ堪ざれゆゑ衆賊を找ゆゑ書院ゆゑ兩戸四五枚打破ゆゑ稠入ゆゑ姑麻ゆゑ姫の短刀ゆゑ推ゆゑ獨縁頰ゆゑ立在ゆゑ支ゆゑ光景神狹人狹ゆゑ驚ゆゑ疑ゆゑ可ゆゑ猛可ゆゑ書院ゆゑ建列ゆゑ燈燭の光ゆゑ射られゆゑ毫光ゆゑ似ゆゑ衆賊齊一阿ゆゑ慌ゆゑ惑ゆゑ仰反ゆゑ倒ゆゑ俯ゆゑ後ゆゑ賊ハ推滾れゆゑ已ゆゑ劍戟ゆゑ辟れゆゑ戰ゆゑ痍ゆゑ負ゆゑ五六名ゆゑ及ゆゑ隆光怒れゆゑ聲ゆゑ立てゆゑ不覚ゆゑ何事ゆゑ姑麻ゆゑ姫萬夫ゆゑ男ゆゑ鬼ゆゑ神ゆゑ口ゆゑ是一個の妙子ゆゑ左右ゆゑ封市助の武士ゆゑ力ゆゑ殺ゆゑ捕ゆゑ叫ゆゑ擬勢ゆゑ立られゆゑ衆賊ゆゑ發く起んとゆゑ姑麻ゆゑ姫見ゆゑ笑ゆゑ言可笑ゆゑ天四詞ゆゑ殿ゆゑ驚ゆゑ清ゆゑ河内ゆゑ隱れゆゑ楠氏の嫡流ゆゑ我壯院ゆゑ父祖相傳ゆゑ千劍破の城ゆゑ異ゆゑ然ゆゑ白刃ゆゑ毎ゆゑ土足ゆゑ踏ゆゑ汚ゆゑ知ゆゑ郷ゆゑ来ゆゑ四個の賊ゆゑ我一刀ゆゑ八段ゆゑ做ゆゑ目前ゆゑ見ゆゑ知ゆゑ死地ゆゑ入ゆゑ天の網望ゆゑ儘ゆゑ一個ゆゑ漏ゆゑ這世ゆゑ暇ゆゑ取ゆゑ果ゆゑ群ゆゑ隱ゆゑ衆賊ゆゑ突戰ゆゑ刀ゆゑ光ゆゑ競ゆゑ姑麻ゆゑ姫ゆゑ短刀ゆゑ

殺靡非けるる秘術の大刀風その刃尖ふ當るの真額梨子割車創或い大袈裟波割瓜の腦
脳西出く死ぎるもまく然らぬも深痍ふ平張俯て殘寡ふ隆光焦燥て短鎗をうち
振り暴なる獅々の高山領より降ぎる如勢猛く只一鎗ふと突撃るる姑麻姫囚りと身を
反しを打拂々々一上一下と戰ふる刃い絶ふ九寸五分ふ護身刀ふ有るとどめうち振る毎ふ虹
霓の天ふ横ふふ異ふ胸を刺んと欲れば其の刃胸ふ在り面を刺んと欲れば其の刃亦面部を
掩ふ或い長く或い短く一身通て透間なければ隆光心驚て眼瞑を腕衰へ淺痍を負
なるのを見て鎗の蛭巻砕棄られて既ふ危く見えさりける程ふ雲館奇峯五白鮫振
平の両賊い初ふ痛痍を負ふければ庭の樹蔭ふ退て瘡口より流る鮮血を吸々息を吻く
在り一ふ頭領五十槌隆光が姑麻姫ふ殺立られて既ふ必死の光景を樹間躱ふ透一
見て垂涎て逃んいさまぶを拯て俱ふ走んと諜一合ふ共侶ふ大刀振翳一樹蔭を出て左右ふ
別れて殺ぶんと找むと姑麻姫を囚ふ先這奴們を殺拂んと呂刀尖を烈く左右ふ當

るるを隙ふ隆光い立ち一て必死を免れ度ふ紛れて逃く往方い知れざりけり介程ふ奇峯五振
平い稍隆光を拯ひふけれい引外く走んと呂甲斐を奇峯五い利を肱を砕落されて仆
る折ふその身の天刀を膳を禹煞と事ふて叫び果て死でけり振平られふ駭慌て逃んとるふ
便りを知ぜ拄んと力足ふ踏ばいふ一度を失て左の肩より大袈裟表ふ砕れて撲地と三
段ふ軀ふ倒れて仆るけり其の餘薄痍を負ふ走りけ小嘍囉們い逃亡て殺れる賊徒十四五
名隆成紺坊八念珠七蛍八奇峯五振平們い小嘍囉八九名を中ふ呼吸の絶ぎる兵
絶ふ二名を過ぎりけり只五十槌隆光のを天罡維を漏れふ似れど他も亦是矢傷の鳥を衆賊
大半討滅せられて勝鬨揚る鶏の聲庵漏の くふ高く ぎえを曉ふ ぎりふけり登時垣衣い
素湯を茶碗ふ汲とを茶托を載て遽く書院ふ入を姑麻姫ふ薦を利運を祝
去る鈍ぶ ぎりけり然ば又姑麻姫も垣衣を心利る挿を賞自若とを先血刀を
洗んとを躰て縁頰ふ登れば垣衣い浄る盤る水を刃ふ濺ぎ撒て鮮血を流一ぎる程ふ隅

屋復二郎安次は後門路より稠入りくる衆賊を大半夷げ殺れば主の安危を問んと走り書院に
来ければ姑麻の姫招ぎ近着て主僕迭に賊を撃ち進退を低々と報られも考報もて小雲時
笑扇に入りけり浩処に八九の村人們は這荘院に強盗入りぬと聞くに知りて驚く焦火を振照
ら棹棒連枷などを携て那這より走り来ける程に這里なる農僕們も皆耳扇より出て来る他
らの們は後門をうち成るより既にあり空をありけり当下安次は前門に立出て来る村人を呼ひ寄て告て衆
賊対治の後これぞと辞して仮還り左右なる程に天は明て島の茂林を離れ時候を他
并に二三個の奴僕かり来て安次に報るを聞て小可門に蟄居て外出るとて
仰のうと羨ひ然れども御危難を外れんとの堪くければ輔の相公に報まうさせ御加勢城
乞禀さあと尋思て辛く拘賞より脱出て那処第へ推参て低々と告禀せに真
夜半時候の事これば速に人馬整へて思ふも似ず時を移されば今出て来さるあらんの兵を禀
上んと走りかりひとふに安次点頭てよく心つけたり非除那期に合ずとも必是李部殿に報

禀ぜんとあるに実検せられば萬緒に便りよるべと答て躯て退りを姑麻の姫に報
席を儲て外に立て等程に楠式部少輔正直は身甲に肱鎧臑当を桃花馬に跨り
院内を抜け当下楠正直は馬を門前に乗放て引れて上坐に着らば姑麻の姫は衣裳を更め
奥より出て対面を主客の口誼言訖れば安次は席末より膝を找て恭く正直に対て群賊
乱入の為体并に主従前後に狂く太半殺捕らるを当国の平護遊佐氏の兵と通達
せられまく欲るを演かば姑麻の姫は安次一個に功を譲て具に報ぜば強人の頭領とおぼしき
て痛を負ひ逃亡るは事の趣及小嘍囉とおぼしき死るもあれば生捕れば生見聞る出処は名
必知るべとのたまひけり正直これを聞て感ずると大に驚き憶ず貌を改めて適愛に主僕の智
勇一個は妙子一個は後生外に幇助の兵あるを聞ず
代未聞とのたまへり昨夜賊難の告あるより心ざわりは惴りかども直夜半これば人馬聚合ぬ

土兵ども地の民を駆集めて軍役に使ふを
ロハモノ訓しろ餘も皆これに倣て知るべし

今に至りて汗顔至極の次第なれども官府の支へも我左も右も提計いへ這美人心安かるべし。先その屍骸を一檢せんとの次に安次あり。之を先に立ち案内をして書院の庭より後門に廻り臥横たはれる衆賊の屍骸を送もなく見せしが正直連りに賞賛の聲を絶ぜず檢し果て舊の坐席に歩を運ぶ却姑麻る姫ふたり對して少しも勝れる主従の武藝に男敢賊徒をその身に兵具あり弓箭短銃を携へて前後の門より乱入りしと覈し果たるのち主従倶に薄痍一箇所負ざりしは極て奇なり。京師の御沙汰宜しくば幸ひに正直も倶に面を起すべし。豫ねて覈なるあり。近屬這地は故あり盜賊在りしも他所よりも來りしも土民久しく安堵して夜も鎖ぎとなる。

問ぜば知るとあらん兵毎快く牽坐よとの次に伴當土兵美りぬと応じて庭と背門に覈られる四個の小嘍囉を牽立て縁頰近く椎坐して正直に立ちてたらくとこれを見るに背門に覈られて在りし両個の賊は一個の鼻を覈破られて歯も皆摧脱されば問へども絶て応ぜず又一個に小嘍囉は右の頰より左まで覈ぬ抜れうければ是もまた絶命なれども倶に深痍に衰果て霜枯野邊に鳴く虫の音より微幽なる呼吸の暢なるを一言半句も招ぐに氣力なく痍員毎なりければ拷問竟に其の甲非を糺すに左右なる程に中なる二賊は脆く息絶れば姑麻る姫も安次も痍を員ぜずして生拘られしと悔しく思ふ色ありて云云とのいけると正直なる慰めて約束に這四個の賊は深痍に言ふ古不便なれども招ぜざれども守護盛を以て処へ徇示して悄々地に穿鑿せられば逃亡あらんと云へる件の賊の頭領も竟に捕られて生口并に衆賊の首級を遊佐の城へ齎して嘉賞に就盛に許て隅屋復一に共侶に那里へ赴く准備をせよとの仰に外面見出して各れ兵毎その覈られる強人の首を送るに覈を落して立なるべしとおびただしく五個の首級は耳朶を穿て牌を附よ我いそを家則して遊佐の城へ赴くん土兵両三名いるべし這里に留りて快旗陀四維と召聚へ支徒々と吩咐して賊の屍骸を乗せたる餘の支へ箇様々々と詞せりく言ふして一個の伴當を宿所へ走らし衆賊伏誅の

趣を正直の妻室木石と女兒甘子に報ゆけり。浩処に正直の宿所より。炊ぐる戦飯と奴婢二人
名に擔荷して。爰も這里へ遣りければ。士卒們領受合して奴婢に茶と乞ひ結縁草上に坐して
。倶に腹を繕ふ程に正直も割れ竜と披く。早飯と喫るとも。恁る非常の折なれば東道の豊待
あるべきにあらねども。人ヨければ奴婢奔走して。庖湯の煙生常に倍る。元紛のべらもあらけの。恁而已
牌の左側に旗陀羅も聚い来る。准備敷正成と竹そそりぶ正直は遽く。姑麻る姫に別を告て両
個の生虜と筏に乗して旗陀羅に。これを舁し。衆賊の首級と土兵們に推ささて。曲さび馬に
乗り騎々。遊佐の城へ赴く程に。隅屋安次も身装して。伴當と倶に相従ふ。共に路ハとそいそ
け。余程に九村の荘客們に楠正直主従のかの去りぬと告知して。又荘院に聚合る。衆賊對
治の鈦びと喋々き相述て。農僕們と共侶に血の流れる土と鋤て別壌と布更るとはるに。
中に採番匠もやって破られる後門と書院の縁頰る雨戸まで立地に修復きけり。姑麻る姫に村
人の事毎に昔と忘れぬ心操と鈦び感じて。恁并に其の餘の奴婢も。恁々と吩咐て這村人們に

飯と啖し。酒と喫ふ儘せりが大家飽まで飲食して鈦びと演徳と稱へ。各々宿所へ退りけり。
是より先に正直に馬の足掻を早めて。遊佐の城に入る程に。伴當と走らして。正直非常の
誄ふよりて。對面と請ふとらせたり。折々遊佐河内守就盛に向注所に立寄て。那這る民の訴を
うちに聞て在りける。楠正直来訪の空えあるふよりも。恥て退て對面と主客の席定りく。鉄に寒
暖と演恙を相祝し。看茶の礼も訖りて。時に正直。脇と找め就盛に對て。昨夜九村に
姑麻る姫の宿所に強入して。乱入りと主僕前後の門内に相拄て。許多に敷捕ひ。中に頭
領とおぼしき賊に。逃亡て遂に其の往方を知ず。又両個の生口あれども深疎に哀れて
のの。この克べもいつぞ故に衆賊の出処姓名。註誄の照験をとへども。各処々に徇示されて。件れ
金疹あるのと。穿鑿らしのみ。榻捕ることかたく。恁べ。下官に那大変と報られよ。人馬と調へ
緝捕の輿に姪女の宿所へ騎着ていへども。支果る後なれば。詳に知るもなし。これより
姑麻る姫が家の若黨隅屋復一郎安次とは者に件の生口首級を示して。訴に及ぶ。

那安次と呂寄せて問ふに分明ならん。と告るを就盛うち听て驚くと大くに思ひ難なる眉を顰めてそを安次ぬのふそひ當郡ゆ五十槌電次隆光とふ郷士あり。他に武藝に師表ゆくその性義侠の豪傑なれ。這年来地方の輿ふ偷児を穿鑿り捕へて斃るれ世もヨメかりけれ。這地久く静謐ゆ土民安堵のおもひを存りと偶ゆていひ然る群賊の乱入ふ近来未聞の椿事に顧ふ件の強人ども當國の山林ゆ躯居るゆ中ゆ他郷ゆ来る悪黨ゆ縦その金瘡を照験ふ有るとゆ餘国の知ゆ這地ゆ搦捕んかとゆ思べ。されども且泉首のゆ両目秘措て悄々地ふ餘類を穿鑿せそ復一とらふ若黨ふ衆賊乱入せ光昱京ゆ鞫問ふ便宜もあらん誰ゆ在るその後生を快く召れ。といそぐ立れ。時佐の郎黨阿と甘ゆて次の間ふ扣居る安次を招て找めけゆ登時遊佐就盛ふ安次を召近着て昨夜戦ゆ進退と賊の多寡とその打扮を曲々ふ問ひゆ安次ふ有つる隨ふ。これをふと平伏して事す姑麿姫の武藝を稱へ。その身の挺を功をもゆ初姑麿姫ゆ書院の庭ふて庭鶏の賊ゆ四個ゆ

ゆ捕へ斃ふ。これふより安次們を喚覚して防戦の准備を速ふ做せてゆ又其賊徒ふ前亭のうちより打入るゆ三十許名又後門ふ十四五名一時ふ乱入ゆるを主僕前後ふ相接ゆ多く斃ゆ果てるそゆ中ふ頭立てるゆ四五名あり各身甲ゆ肱鎧臑当して或ふ箙を負ひ角弓を夾ゆ或ふ短鎗を負れるもあり。を大々ゆ斃ゆ捕るその首級ゆ脾を附られゆ。又小嘍囉とおぼし。ゆ鎗紐袗を被ざるふ。内中ゆ浅痍を負ゆ那頭領ふ先ゆ逃亡たふも幾名ゆ。これゆ。んとおのふゆ又頭領とおぼし。ゆ賊ふ姑麿姫と戦ふ既ふ危うし折支當黒の封帛助ふ。よりて引外て逃亡るそゆ吉支の為体見ふ。ゆ。ゆ漏さゆ辨舌爽ふ次第を文系さゆ報ゆ就盛ふ顧感嘆して。ゆ倍ゆ姑麿姫の武藝胆勇を。ゆ靭繒半額ゆ思ふ物の數ゆ。ゆ女中の丈夫とふ。ゆ生口并ふ衆賊の首級ふ就盛懐ゆ受取ゆ。ゆ京都へ。ゆ。ゆ下知ふ従ふ。と答て正直ふ。ゆ對ふ。衆賊の乱入夜半とふ。ゆ。ゆ姑麿姫の宿所と然ゆ遠くゆ。ゆ援兵その期ゆ過ざ

せしハ後見ぶりし甲斐なあるや怠慢の罪なきにあらず是等のことを明々地に管領家へ執達せば。異日の御沙汰心もとなし。その義を怕れ念ひあらずなく便直を旋らして那逃亡たる賊の頭を捕捕てまゐらしなバ然るときハ愁も轉して歓びとなるを提往ならん。なる下官が内意なり勿論當城よりも悄々に緝捕使臣をヨヌく出して穿鑿由断あるべからず只宜く這意を汲なひねと苦々しげに穿君も示せば。正直听々赧然と汗する額を拭ひもあへず好意を謝し告別して安次并に伴當をいそぎし立々城を退りて河備の宿所へいそげども欝々としく楽まざ物をおもへばおのづから馬の足搔も果敢ゆかず。かへさハ路の長畷早稲の穂秒に風戦ぐ秋の日さへ短くて下晡になりし時候なら稍く歸宅に及びしが。安次ハその第まで正直を送り来く告許の首尾の宜しかりける歓びを演別を告て伴當をつれて七町歟六町に餘る八九村の荘院を投て還りけり。

第三十四回　棗子の恨五十槌僞書を作る　投名の悔荷二郎同悪を陥る

卻說その朝五十槌電次隆光が千劔破村なる宿所にハいまだ天の明ざる程に小嘍囉八九名各浅瘡を負ひながら逃て八九の荘院よりかへり来にけれバ長總驚き起出て事の要を察ぬ。大家聲を悄まして昨夜の捧了酷利わらざ小頭領を首として七股肱達も皆斂なくられ大頭領さへありけんハいまだ安危を知らざれども先かのよしを報禀さんとぞ辛く脱れて還りぬといふを長總ハ果をもいはせずいかにせんとぞ泪に涙呑みて色蒼然て立ず居ず見恕太難て。なれその事の趣の根穿り葉を穿りて問ふに小嘍囉們ハ迭代りに姑摩姫主僕の智謀と勇悍豫那撒を査しけん前後の門内に相柱えて擊か靡けなる体首といへバ悸々と尾の箇様々々にてそと今見るごとその夜の光景話説巧者の品をて漏さず曲なく一五一十も外事なりバ倒れ與もあらんと顰眉ひそて听く。胃に火の程く一家の破滅事の変卦身の吉凶をトひ難て今はらに浅まし。佟の胸算木投頭をぞ困じる浩処に隆光ハ辛く必死を免れ背門路よりかすかに長總これをみかへく吁歎しや俺所天ハ然きも恙もなかりし歟と問く駈て遽しく。

去迎んとせし程に隆光一聲阿と叫び俯覆に仆れて長總并に小嘍囉共は吐嗟とばかり驚
き抱き起し口に喫活の藥と水とを術を盡す程に隆光ようやく息出て頭を擡げ左見右見て長總欽
課なるぞ丙丁なるぞ選りに選りて此の程の腰を組直して朽ちや低徊りの淺痕に屈せる我なるぞ只
極の実の獨子なる雷九郎を姑麿姫に殺せし恨に胸に満ち憶に氣絶せやりけん成敗は時
運に在り悔てその甲斐なしと存命てこそ我兒の與に異日然と復さんと我金瘡の妙薬あり
若们もこれを用ひよと腰に着る藥籠より件の薬を含ませて先身の痕にこれを塗るに
もの及ざる所へ長總自ら傳へて布を膝けさせし程に小嘍囉们もその薬を賜るべしと
用ふに疼痛立地に退きて起居自由に成ぬ中に昨夜挺頭三荷二郎们の隊に屬て
那莊院の後門路より折入る小嘍囉の二三名あり隆光他们に向ふその嘍囉挺頭二六
八九の若黨隅屋復二郎安次が投石に撃れて死せるを又荷二郎は支の初に門の虚実を探
らんとて獨潛入りて久しくありしが出て來ぬ存亡安定なりしを初て聞く遺恨堪ぬ憶ぬる

嗟嘆に堪ずと荷二郎の生拘られ狡獪撃れ狡二樁は一樁は錯へば姑麿
姫の刃失は當りぬ亡必是撃れ死んぬるを這餘の隊下の痛痍に拘れもわるかり。
拘れもわるかり。汗が拷問の痛楚堪ぬ堪ぬ。招了分明なんぞ我身の利害其首はわりぬ
走ぬと當惑の眉を顰めて哀げに小嘍囉们は頭を擡て寔に然と答るに長總は只呆き
果て赤入て更に計の出る所を知らざりけり姑且は隆光思念に又なるを心を解ぎ長總を見て
我妹よ汝のこと憂ひの夜静の事守に安き遊佐より緝捕の沙汰あるを雷九郎を首とし
股肱の田乙舊のごとく多の共伴は這里まで亦怕き足ねども今はその甲斐なく人の數は八
九名それも痍員の臥褥の床に獨前を御ぐるわねど三十六計走るに
如ず資財雜具を遺多窮屈く。俱に他郷走るべ大家頭を繕ふて准備せよとそが
赤炎僕们その所のものも縁由を多知りけんを逐電なく在りしとて隆光又長總に
頭を立ぬもせん術なく。さらば丙丁一両名鹿漏に退りて欲をせよその餘は我と共伴に裏なる

日の東西より擔造りねと長縄も徒に折れ物と思ひそをそんに要ふ。金銭衣裳と取調べくせよ起行の准備をぞ快々立ねと焦燥る。火速の指揮に長縄も滅没る心を察へ然りとて能く皆共侶に身を起えん毎程に次の間に人あり。やそ等の人々と嗅禁めて聲と共に隅亮ぐ撲地と推開く。徐に扶き寄る者をと見れば別人にあらず水綿張の荷二郎にその身素裸の庵を負ひ打扮昨夜の仮ふ。背ゆ東西より伝へ聞く祇色と駆ふ。皆訝るぞ中に隆光ぞ聲を張く水綿張和殿に恙なわ。既に我密談を那里に偷ふ。欲他郷へ走んとせる火速の准備を禁ゆ是甚だ情由ぞと問ふ間に荷二郎に傍に坐を占め背ゆ。祇色と解却と。却昨夜在下は暗跡の火光に待不樂に。徐に仮ふ。

もぞ報禀さば訝るに理の如徐に仮ふ。却昨夜在下は暗跡の火光に待不樂に。

獨那荘院に潜入く。那這と覗に程に前後の門より諸頭領の齊一斉に入り多数なる兵響高く鬨えて登時在下の寄り這荘院の主役の逸速く機を査ふ。けん奥に悄語く聲に

もそれば克ぬ者を防ぐ者ぞ。きく人の前後より操合く攻るも。輒く大利を得ん我いその虚に眼付て。一千金を窃ぜんぞ。やく尋思をすべ夜襲の場に面出せばいるまもまん身を潜ぬ那庫蔵に入らまくもそれと其頭に婢妾毎の数番と多く奔走まもそ遂に屋尻を鎖ることるもそれ然ばとるを空く出るもの下に潜躯まもそ。貫子の便宜を覗ひ。今一番の挿了に空憑ゆく。然いも猛かる人々の打散えんとぞ。天いに朗々と明一時候姑麿の姫の叔父楠正直ぞ加勢の輿に数十個の上兵を倶ぬく来に。けれどもそれ迹の祭に事の要に立ぬ。のちに姑麿姫と若黨の復一郎安火に応対の輿。書院に在り。然而実撿の果て。正直主従ぞ早飯の割竈を抜くよりぞ。前世の儲湯と水と。園宅の奴婢ぞ奔走て。奥に入のあるぞ。あたりその虚を覗ひ立ぬ。

今相違ぞ是ぞ。とかの東西のあるぞ左右ぞ程に姑麿姫の便室ぞと思ふ一室に潜入くれて。書案あり。書籍もヨかり又西のそに横三尺ぞ。社壇ぬる処あり。

あり引の山のとさらもうををりの
ぎんこうーとのぞんさうはかぞえ
残盗定死須敢巣先
人るこゝゆ世の秋をまるむ

有像堂

注連を引亘し。白練の小幕を垂れば何かあらんと遽しく撥開なく内を窺ふに菊水の花瓶着くる黒漆の箱一箇ありて神像をば絶て今今抗試ふ重さ忽ちも措れも其頭ふわりける袱ふ裹く偷盗り。狗寶より脱出く還る山路の樹蔭也件の箱を開き見るふ原是二重箱ふ内ふも亦菊水を撒撒金ふ描做る軟縵草の色匣あり。訝り奇ぶ繙き見るふ皆金器ども然とも葉皮東西ふもあらねば舊れどもふ袱ふ包まれ背ふ負ふ心ふかる頭領の安危をとなく問んとく方僅背ふ入りかつ料ぶる逐電の密談をうち笑ひ詞の腰を横遭ふ折ふ觸れふ磨とも商量且听更別談ふあらぶ在下ハ久く狂院の簀子の下ふ身を縮ふ久く躲きあり。折那首の奴婢們ふ噂せり。事の始末を洩ふ生拘れる火家ハ丙丁ふハ是四名ありけるとも後ハ路ふ在りける二人ハ那安次ふ投石ふ斃れ。歯ふ鼻ふ奇ふ折れ問ふ物をふ喰ふ又那麼仆ふる二人ハ深疾ふ堪ずけん牽縮ふ程ふ倶ふ息絶ふ遂ふ徒れば誰ふ招て

老ふ夏の露見ふ及ぶ猫を卸して走帆の商談ハ且休ふ急ぶ要ふ多ふ一と落着ふ解詩ふ隆光ハ左ふ右ふ听く左ふ優る和殿の才覚死門ふ入ぶるのふ多ふ跡の事ふ遂ふ知りふ弥妙ふ生拘れる四個の隊下ふ両個ハ脆息絶く残る深疾ふ後安きふ似れども不幸ふ七ふの瘡疾ふ招て生ども定ふ加旃留守せり奴們ふ夏の破敗ふ知りけ未明ふ齊一逐電ふ惜ふの身ふ連累ふ免れて首訴ふ依料りふ這ふハ甚麼と具ふ荷二郎ハ微笑ふ宣ふ生拘れる痍員の火家ふ投石傷の愈ふ物いまふハ程ふ又留守ふ鏑錢們ふ夏の敗れる耳怕く首訴ふ釋便直の歓ふ隆光ハ側ふ長總ふ憑ふ心地ふ小嘍囉們と共侶ふ覚ふ膝を找ふ登時木綿張荷二郎ハ偷来れる袱包を箱ふ蓋ふ那這と遽く解開く然而隆光ふ耳ふ見ふ這二重匣の内ふハ是楠の家の什物錦の御旗菊水の旗並ふ南帝の勅書ふ又

正成正行の軍令狀正勝正元弟兄の自筆の文書ヨリあり。その中に。とゝかくも那這と用ひ見くみさ正元の自筆ゆゑん軍兵催促の一通ありその文言に早奉為朝廷駈催忠誠男士而可起勤王義兵事。云云七月廿八日。河内守橘朝臣とあり。今在下が筆詩策ありとのこれ。

是えとのを隆光ゆゑ亦いふ為計略ぞと問へば荷二郎聲を低めくいまぞ悟りぬぞ這橘朝臣とも傷よく偽筆ぞ者に課く。嫡女姑麿姫との五文字と年號花押を加へく。錦の旗菊水の旗南帝の敕書と共ゆゑん身ゆゑ濟て正直主の第に赴き那人對面せる折。悄々地に訴へんゆゑ知せのぞ。貴所に禀ぞ面伏ゆゑ姑麿姫刀祢が將軍家を殺さんと欲ふ逆心今に休ぬ。この義ぞ比類捕れを悔ぬぞ。剰首を續せれ。

今國恩を恩とも思ぐ專謀反の企あり。然るに南朝殘餘の武士を相譚ひいで義兵を起へんとて。鏃を研ぐと既に急ぐ在下が當初正勝主のゆゑ屬る舊縁あるゆゑ知りぬ連に招き呼誘と商議敵に定れ不意に起て遊佐殿と貴所を先滅と當國を討從と計較ぐ。

て恁々と在下昔年謬て御合見正勝主に從ひ奉る曩に南北両朝の御合體の後ゆゑ室町將軍家の御武德を仰ぎまつりぞとのてゆゑ。北を甚廢ぞ婦幼の反逆に荷擔と今ぞ二張の弓を雪ん。ゆゑ。ゆゑる虚実を知ん與に陽て且その意に從ひ謀反の計談に與りぞ姑麿姫斜めぞ懷ぐ。向後を憑ひ向後を憑ひて錦の旗菊水の旗并に軍兵催促の文書一通を相添て在下に預けり。恁れぞ野心分明ぞ悄々地に貴所と遊佐殿へ首訴せぞと思ひ。蛤さび思ひ旋ぞ在下千劍破の郷士ぞ。國家の恩澤を蒙り。ぞ。甲斐なく。恁だりの小惡をゆゑ征ぞ。克ぐ國守を勞ぞ外用實義に違に似り。討滅と後に是等の意旨を訴へ獨尋思をぞ股肱の人甲乙仆禁自餘の生徒に。悄ぞ諜合ぞ隊兵絶に三十餘名いる夜八九の莊院に推寄ぐ。朗方に反忠の者ぞ敵に機密を知れ。その戰ひ合期ぞ拙郎雷九郎隆成を首と憑切る門人四五名その餘の雜兵に至るまでヨワく戰没せ程に在下も亦かの如く痛痍を負ひ退きたり。

考ふる宿意を知る人なければ夜偷の強人多く立て戦没の首級生捕の雑兵们を遊佐の城奪れより風聲ふるそ知る在下那美を初より訴ぎ千慮の一失後悔の外いなし尤恥ぢとぞ已ことなるも孤忠の宿意を目今告訴ふ及ぶ願ふ是なる趣を遊佐殿通達せられ討ひの軍兵を差向ふ在下先を住りそ姑麿姫主僕を撃ち果し上を恩恵を鼓ひ下へ我見雷九郎と倶ふ戦没せ門人们ぞ與ふ然を雪ぐ稟を所詐詭を奥據へ是ぞ實事考ふる秋忠訴ぎく這二條の旗と共ふ偽書せ催促状を遞與ふ計畧立地ふ行れく姑麿姫を奪せ考べ然るに兵私の怨を復ふ考ぶ恩賞を大々考ぶ室町將軍の御家人ふ成登り考ふ幸ひ考ん這議ふ考ふと真實立く語言巧ふ耳ぢきふせ隆光花忽地用ひ欺ぎ大々考ぶ憶考ふを額ふ加へく通愛を妙計考ふ我與の諸葛孔明感ぜふ考ふ考ふ考ふ従ん考ふ勿論ふれども遊佐氏を這河内の守護考ふめと腐き姑麿姫と叔姪考ふ正直夫訴とふ考ふ甚麻公考ふと詰れば荷二郎ふれぞよ在下嘗這地考人の噂を

笑さふ遊佐ふその性狐疑まくて決断ふ甚遅かり正直主ふ姑麿姫の正死叔父でふへども親の時より南北ふ別れ仕へ分けれぞ今ふ至を中分り陽ふ他夏考ふ為れども陰ふ迭ふ刃を磨ぐ讐敵ふ異考ふぞと這頭の人ふ皆ふ左ふ右ふ思ぞふ徑ふ遊佐へ訴考ぶ那人狐疑の癖休で正直主ふ商量を考べ登時又正直ふその身ふ功の考ふんとを醋く考ふく云云と議論起ふ時月後れく機密の洩ふるとふ考べ然ば遊佐ふ訴ぎ七正直主ふ先毅考ぶ那人必その身の功ふ考ぶを喜び信て就盛主ふ提成を考べ遊佐ふ亦正直ふ姑麿姫の後見ふ且叔父考ふふ用捨考ふ考ふ反逆の訴ふを忠義と稱て疑ふ考ふ信悦ぶその説ふ任せん在下ぶ計る処を大要ふ茲ふ考ふ低ふ悟り考ふぞと辯舌委ぶ論ぶる謀慮ふ考ふ圖ふ當ふふ似れば隆光いく感悦七奇才々々と稱れば長總ふ考ふ小嘍囉们も耳を傾け賞賛七夏成ぶと云ふけ當下五十槌隆光ふ小嘍囉们を與被て若達ふ考ふ我明日齋を三種の將中ふ細工用ふ文署ふ舊日の考ふ蹟ふく似ぶく件の五字と年號を寫得るのくあるぞと問ふ四下を見

かれば筆柿小紋二と喚做す。一個の小嘍囉找こそ小可得るはあらねども一日もよく学び
ぶそを左も右も仕らんとの今隆光黙頭く。汝且よく学び墨色筆法違ふと云ふ事なかれ
と言ふ。七文署を含む遊与ふれば小紋二は美りなと答へ舵に附き見て懐れと退りけり。
登時又隆光は荷二郎に対ひて剛才示れ。至妙の秘策をも聞より料ぞも這
胸襟を聚す。然び那正直の河備の宿所に赴んに遅延に及ぶ逐電する奴ども首
訴するとあらん件の偽書をいそがとく秘計を行ふべと問ふ荷二郎沈吟して多論
るべ。非除逐電せ平人ども身の與ふ首訴あるとも我計行れば他ども返忠を
虚とりて取用ひらべるぞ正直主は那荘院より生虜を牽く。首級を齎して遊佐の城へ
赴きれば帰宅の嘯貳ふるねべ。在下は晡時の比より悄々地ふ那里へ赴きて夏の答を覘ひ
来べ。低れば翌の朝まふ齎す東西を准備して徐ふ那里へ到るべ急ぐべ要あると
べ。とのふ隆光又頷く。示談の趣その理あり。翌の旦開と定むべと答る折から庖湯より小嘍

囉ども出でぬる。五十槌夫婦ふらも對く。襲助代の俺ども二名左も右も炊事の卒
早飯を食べ。とのふを見る隆光長總皆共伯ふとなりて猟場の迹の鳥自物朝飯
啖ふ。土ふけ。低而這旦は隆光も小嘍囉ども疲労ふれば早飯を果き。舵に枕
假寐と日の傾くを知ず。ふ獨荷二郎は打恥もせず申牌の左側より精好の袴を穿て
紈銅装の両刀を腰ふ跨べ編笠深く戴き。正直が河備の宿所の頭ふ邁て覘ふ正直は
遊佐の城より。目今還り来りと聞く。士兵ども眼をとて宿所を投く還るもヨカリ時ふ
些早かりけりと思べ那這を徘徊る。稍黄昏ふ一時候更ふ正直の第ふ到り執接の
若黨が立を迎く却るう。在下は東國の浪人木綿張荷二郎と喚做ものと一大事
告訴の與對面を希んとく低は推参仕りぬ這義相公ふ禀さるとのふ若黨詐り
云ふ且玄関ふ留置く則その主正直ふ支任心々と告ふけり。介程ふ正直は遊佐の城より還
ふ。就盛ふ窘められる。その言酷く心ふかりて鬱々と七ありけるふ見るせぶ及ぬ

東國の浪人木綿張某甲とぞ。密訴の輿を推参して。対面を請ふとのよし。聞く眉を顰めて。何夏ぞ。思ひ合まるよしをみれど。一大夏を告ぐとへれば。対面をぞ。かねて快々其頭の准備をなよ。敦義仰せ告ぐる快々せ。ぞ若黨ハ阿と応ず。果ぞ遂巡して立ちけり。却説木綿張荷二郎ハ玄関に留められ。等と約莫半晌許。接の若黨ぞ。多ハ出で来の荷二郎に対ひ。御邊来意の趣を即使披露に及び。老爺対面せべしとあり。卒這方へと先ハ立て客房へ案内をぞ。當下楠正直ハ老黨湯浅風爐八郎敦義と一個の小侍を相従へ。その身ハ客房の上座に在り。菊燈臺三隻欲四隻欲那這に點じ。大蠟燭照耳りて小心の体見えけり。却荷二郎ハ執接の若黨に引れて席に入る折。中刀扇子を次の間に置き。膝行して找こを正直火光に就て。ぞ。東國の浪人木綿張氏荷二郎と和文ある一大事の密訴とあれば薄暮なれども対面をぞ。その義を聴ん何夏ぞと。問へば荷二郎頭を擡げ。浮浪の身をも又ぞ国家のため輿貴所の輿に見参を請まつり。ぞ見を参りしハ面目何夏欲これに優ぞ。然ども鞠を等ぞ。禀上ぞと。ぞ憚るよりもぞ左右を退け。ぞ。とのまま正直領きて。ぞ。趣その意を。ぞ。但這一人ハ我家の老僕にて素より腹心の。ぞ。輿に酌に及ぶべ。その餘の者快立れ。とのれ若黨小侍者ハ倶に次の間へ退けり。荷二郎ハ元を目送りて。ぞ。密訴の次第言長くとも先我ぞ禀上ん在下原ぞ鎌倉武士にて官領持氏朝臣に仕へまつり。微禄の雑色ぞ。聊衍ることあれども。身の暇を賜りけれ。その地の所親を忘れ則妻を携て千剣破村に尋来れば。憑れ樹の下に雨を漏る所親夫婦ハ身故ぞ迹絶ぞ。ぞ進退其首に分ち。せん術の。ぞ折ぞ人の媒介ぞ。儘ぞ即那村の郷士ぞ五十槌電次隆光が武藝の弟子若黨に。ぞ。妻共伴に他に仕へ。ぞ。月来を経ぞ。誰ぞ知るぞ隆光ハ素より強人の頭領にぞ。生徒と倡ぞ。皆悪ぞ黨ぞ然りけれども隆光ハ石川郡の民金を犯ぞ折々他郷に赴き。夜偷

前の徑を攻と做そのこと。他所より這地へ偷児来れば渉猟く必殺せ〻地方の民に愛敬せ〻れ。畢竟隆光が強人多と知りつゝあれども在下も亦ねつ比まで他が悪支を知らざり〻他へ只管酒を嗜。色を好み勢に任て無盡に我妻を奪と妾に迫りけり。恁而ねて隆光へ獨子雷九郎隆成が意貫に任て密談を礙て貴所の姪なる姑麿姫御寮の嵯峨の院（亀山天皇）より賜りくる一千金を掠略んと工文黨都て三千餘名次の夜丈八九の荘院へ夜偷に打入り出水捉頭三白鮫振平。曽反鼠坊八郎ど喚做る宗徒の強人五六名小嘍囉廿許名件の主僕に撃ち捕られて隆光へ痍を負ひ逃て千剣破の宿所へ還れり。在下をも那夜丈将てく〻べ。とのれ〻かゝる病阿に推け辞ひそめ〻介程に隆光へその子并に股肱の火家を多く殺せ〻を太く恨て。讐を復えと謀る折ゝ狡小嘍囉の天明く獨らて来ざりしかゝ那荘院の奥深く潜び入て姑麿姫御寮の秘措き居る錦の旗菊水の旗南帝の救書楠三世の

遺黒主をどを二重箱と共に偷ゆうと隆光へ見せ〻隆光深く懼びく心に好計を思ひ起せ〻秘密の魂胆その趣を恁々とゝ下の小嘍囉们に示をを在下料らざ嶋崩と一五十と具に知りぬその奸計の箇様々々とゝ瞞ると半嗚許。郷閭にその身が隆光へ説薦ゝる計較を外支ふと亘を漏さず峰に峯を添て其に告れ正直敬ま且呆れ〻多くく問へと欲る時荷三郎が又いふ。那隆光が奸計へ這一椿支のミ為ば貴所と並に遊佐殿をその蘭に計り課せ〻姑麿姫御寮を討滅。その功に乗り遊佐の城へ輒入ることを泛さ〻便宜を張り就盛主を只一刀に刺殺し那城を奪ふ。兵權ひとびとに入が河内を略し〻その勢ひに乗き大和を撃ち従んとそ大望を企う最憚りある言ゝ。姑麿姫御寮を譏訴し〻那身の怨を復ゝ沼るとも只是小事に就盛主を刺殺し〻河内大和を入れんと計較む是大事に在下他が穢れる行ひを知らざ〻浮浪の便に者多故に權旦寄宿をれども這潔白の身を以虎狼の奴に做果ゝ悄々地に這我を許ろ〻那強盗を誅伐せれば国家のため與共

忠告あるべく我私の最愛の妻を奪ひ取られる恥を雪ぐ時至れりと必ずよりて互越て怨ハ推
参仕り候明日隆光が来る折力士を帷幕の外に伏せ一撃に捕へ在下も亦便直を旋らし。
隆光の倶し七来二臂の力を勃ぜば禀も所相違わば身ハ天雷に震死して永劫隋獄の苦艱を
受へ急々律令如律令と天に折言ひ地に盟ふ意衷他事多ゆえ正直連りに駭嘆し且感
ずして大々ぶ傷に措ける扇を合ひ歌杖にて膝に突立要時頭を傾け却荷二郎に
対ひて聴くべし天晴忠告是に因家の乱與れば貫禄に依るべ那隆光が我も
亦人の噂に知て義使の武人と呼べる夜姪女の荘院を開ける那強人の頭領に件の
隆光けりと神ぶ也七誰々亦より知ると云ぶ今宵密許の趣を遊佐氏に通達せば明日隆光が
我第へ来さん折に城内より隆光が千剣破の宿所へ緝捕の士兵を向られて支黨を搦捕るべ。あの
愛もあられよと云ふ荷二郎歎びて計ひ女才あるべの多ねども在下が妻長縄に取竜
られ那里に在。緝捕の大勢奥に折あの愛も詞を添られて愛顧を願ふとの正直ありて其の愛心

安かるべ通達の期に及べども原是女流の乱れ暴くせるべうもあらざるあるべ得ず
と諾ひ密談果て荷二郎別を告て在下這里に夜を深べ隆光に疑れ支の障りあるべ
明日見参に今の内と云ふ正直留難て表べの意に儘て實に明日を緊要れ快く退出へ
と身の暇を取せ荷二郎に意気揚々と次の間へ退き又若黨に送られ初のごと玄関より
出く千剣破村へ還の内。扨も楠正直に鄙に就盛に窘められる身の懈怠に罪を怕れ胸安き在り
けに料も剛才荷二郎に密許に心花開け其の歎び大々ぶ恁るに人速に就盛に諜合せて
明日五十捷隆光が這処に搦捕べく又他に宿所へ遊佐より緝捕使を遣し其の巣穴に掃へ
べと尋恩に云云と消息を書寫に老黨湯浅敦義に口状を言示。件の消息を齎
す遊佐の城へ遣ける火速の使に成れば敦義に主の正直に乗馬を借りて跨りて暮れに走
られ其の夜二更の比及に遊佐の城へ騎着て正直の消息を就盛に呈。對面を請て木綿張
荷二郎に密許のごと首より尾に漏さず就盛に演達し明日隆光が宿所へ緝捕の

仮名伝第四車巻三
湯殿あつま
たらてる
なるやあのちさとあるる虎どふ
ゆどちうんけいたらてるをうる
荷三郎奸計賣隆光
おとをはなのあるたくされる
段三の巻
第三十五回
のちてめふ
てえ〜う
看侠第四十八
小山周作
史実尊第四車巻三
楠孝茂
福三郎
十九
三陸三郎

精兵を遣はすべうもとその隊合を問へかば就盛驚き且憚ぞその五十槌隆光奴豫世の風聲を
伝へるとのあり〜かば義侠愛敬武人をんと憑〜くて思ひ誰の知るぞ金山が等も強人をんとも縦
他が謀れぶと姑麿姫一個の又あるべ患とまるが足ねどもその奸計が乗せれて我倘他信用な
禍蕭墻の下より起て國の乱が及ぶ。然るに密訴の者あり七積悪並設覚るのまるぞ他べがら
一死を贈りて慢が其許へ来るべ力量武勢が長けるも搦捕るが易かるべ。是併李部殿正直の
武運が稱ひ意外の大幸歓び何支欲れが優まべ隆光が宿所へ我べらうも向へ塵も遺さず
搦捕るべ。まぶおるねども明日隆光を含ま逃へ。この這里の力士十名許を和老が隷に遣へ猟捕の
折の幇助がせよ。この這義を具が傳へ赤へ先敦義が答を示へ七力士並が実検使が充べ吾家臣を
擇ぶ。畢竟五十槌隆光が荷二郎が謀られ遂が伏誅まるぞ不日べ又這次の巻の首が鮮分るを聽ねかし。
看ても猜まべ。家詳が知んとまべ又這次の巻の首が鮮分るを聽ねかし。

開巻驚奇侠客傳第四集巻之二終

世ハ今ノ〜〜

但一ヲ

ちうぶん　ちうぶん
文豫世の風聲ハ
ひと　ぬきもと
千ヶ浪人かし　従